

NEXT CONCERTS
》 次回東京定期演奏会

第 **762** 回

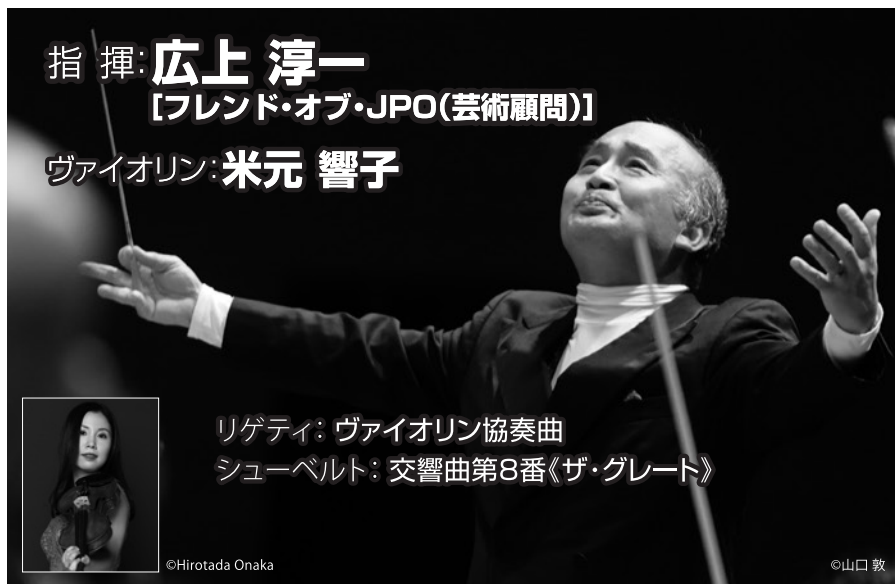
サントリーホール

2024年7月12日(金)19:00開演

13日(土)14:00開演

リゲティの摩訶不思議な異世界と
シューベルトの壮大な交響曲

フルート
広上 淳一氏 & 奥田 佳道氏
18:30~



指揮: **広上 淳一**
[フレンド・オブ・JPO(芸術顧問)]

ヴァイオリン: **米元 響子**

リゲティ: ヴァイオリン協奏曲
シューベルト: 交響曲第8番《ザ・グレート》



©Hirotsugu Onaka

©山口 敦

1回券料金は S ¥8,000 A ¥6,500 B ¥6,000 C 完売 P ¥4,000 Ys (25歳以下) ¥1,500

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー!

広上 淳一 編

きき手 奥田 佳道

広上淳一、シューベルトの《ザ・グレート》を語る

「好きなシンフォニーです。日本フィルで最初に振ったのはいつだったか。定期デビューの次だったかな。ずいぶん時間が経った。60歳台半ばを過ぎた今、お客さん、日本フィルに伝えたいものがあってね。一言で言えば、それは祈り。あと感謝」

筆者注:広上淳一の日本フィル定期デビューは1988年12月の第406回東京定期で、アンジェラ・ヒューエットとバッハのピアノ協奏曲、それにマーラーの交響曲第6番イ短調通称「悲劇的」。シューベルトの交響曲第8番ハ長調通称「ザ・グレート」を指揮したのは1990年10月の第424回東京定期で、プログラム前半にメンデルスゾーンの交響曲第3番イ短調《スコットランド》を奏でた。

「その頃の演奏って覚えているものだね。若い頃はとにかく作品自体を信じて、ポジティブに元気にぶつかっていった。名曲コンサートで指揮したベートーヴェン先生の交響曲第7番の録音を聴くと、いろいろなことを思い出す。何かを夢中になって届けたいというエネルギーがすごい。あなた(奥田佳道)が夜中のラジオ(ラジオ深夜便クラシックの遺伝子)で放送してくれた、外山雄三先生の『ノールショピング交響楽団のためのプレリユード』(演奏:広上指揮ノールショピング響、1994年録音)を聴いた時にも思ったよ。

作品を信じる、音楽に委ねる気持ちは、いまも全く変わっていない。そのために勉強しなければならぬことは多くなった。

さっき言った祈り。僕も60歳台半ばになった(5月5日に66歳になった)。この歳でもう一回《ザ・グレート》を勉強すると、シューベルト先生の音楽に、以前よりも祈りの要素を感じる。

具体的には第2楽章、第3楽章の途中。シューベルト先生はいつものように繰り返しをしながら、歌を歌いながら祈っているんだ。

このシンフォニー。音符は細かくて、しかもその音符はじっとしていない。いつも動いている。それが、繰り返しのなかで重なって行って、最後に大きな線になる——そのプロセスというか道中に感謝と祈りがあることが前よりも分かってきたし、シューベルト先生の素晴らしさを皆さんにお伝えするのが僕の仕事だと思うようになった。

でも表現の上で、当然、広上淳一独特のテンポは出てくると思う」

シューベルトの交響曲第8番ハ長調、通称《ザ・グレート》(グレイト、大ハ長調、大ハ長調交響曲などの表記もあり)は、1825年から1826年にかけてウィーンで作曲され、ウィーン楽友協会での試演や抜粋演奏を経て、1839年3月にメンデルスゾーン指揮ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の定期公演で披露された。一般的には、ウィーンを訪れたシューマンが、楽友協会の司書や歴史家、シューベルトの兄フェルディナントを通じ、この長編交響曲の写譜を入手。それを親友のメンデルスゾーンに送ったことで公開初演が実現した、と解説される。実はいくつか検証が必要な史実なのだが、それはまた別のお話。

ところで今年はベートーヴェンの交響曲第9番が初演されて200年のアニヴァーサリー・イヤー。シューベルトは、ベートーヴェンの序曲「献堂式」、ミサ・ソレムニスの一部、それに「新作交響曲」がケルントナートーア劇場で初演されることを知っていた。友人に宛てて、自分もいつかそんなコンサートを開催してみたい、と記している。「第9」初演の場にいたかどうかは重要ではない。

「第4楽章に“第9”を意識したフレーズが出てきますよね。あれはベートーヴェン先生と“第9”へのオマージュです」

今年生誕100年、ジェルジ・リゲティ(1923~2006)の難曲ヴァイオリン協奏曲(作曲:1990年、改訂:1992年)も定期の華だ。

「僕が最も評価するヴァイオリニストのひとり、米元響子さんにお願ひしました。彼女の希望でもあります。米元さんのことは10代の頃から知っていてよく共演しています。親友でもあるヴァイオリニストのボリス・ベルキンが認めた才能で、少し前からオランダのマーストリヒト音楽院の教授。ソロもオーケストラも技術的に難しい上に、曲の最後に瞠目すべきカデンツァがあり、聴き逃さないですよ。知らない曲と言わないで感じて欲しいな」

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会

